



ファッションショーの様子

平成2(1990)年 『AOL(お化粧、おしゃれ、ファッションショー)』

美しい私—「ありたい自分」に出会う日

AOLの背景にあるのは、“自分を生きること”。誰もが年を取っても、援助が必要になっても自分らしく生活すること。「ありたい自分」であること。私たちの仕事はそれを支え、その環境を整えることだと思います。

語り部活動やカラーバード活動などの自己表現を通して、気付かなかった自分と出会うことと同じで、きれいにお化粧し、おしゃれをすることは美しい自分、ありたい自分と出会う機会だと考えます。

お化粧した女性のご入居者が、男性の職員から「きれいですね」と言われると、嬉しそうに少女のように顔をほころばせます。いくつになっても女性は美しくあることを願っていることを実感します。

有限会社「個性表現」代表取締役の矢野実千代先生の発案で、さくら苑におしゃれの専門家やコスメティックセラピーのボランティアが大勢来て下さいました。女性には鏡を前に丁寧なメイクを施し、スカーフの巻き方を、そして男性にはバンドナの使い方を教えてくれました。

毎週金曜日の療育音楽活動の前には、女性のためのメイクタイムを設け、常備している化粧品を使って美容を担当する職員が、女性のご入居者にメイクします。

職員が「素敵ですよ」と伝えると、「そうかしら…」と照れくさそう。嬉しそうに表情をほころばせ、頬も少し紅潮し顔色も艶やかに見えます。きれいになると誰しも自然と気持ちが浮き立ち、「ありたい自分」に出会えたように

感じるのではないのでしょうか。おのずから寝たきりにならないように頑張ろう、リハビリをもっとやってみようと、意欲が湧いてきます。

矢野先生の提案で、ご入居者がモデルになるファッションショーをさくら苑で開いたこともありました。着付けボランティアの方が、ご入居者に華やかな和服を着せてくれ、食堂ホールに設えたショーの舞台に送り出してくれました。

その日、84歳の女性のご入居者が赤い色も艶やかな振袖を着て、若い男性職員にエスコートされて登場しました。ちょっと誇らしそうな晴れやかな笑顔に、目が輝いていました。

私たちはその日の皆さんの生き生きとした表情を見て、

人は旅立ちの日まで、希望を持って生きられること、人間が持っている可能性は無限だと改めて感じました。





地域の子どもたちによる踊りの披露

平成6(1994)年 『祭り・出会い』

地域、国を超えた交流と主体的な 生き方の発見

さくら苑で毎年開いていたお祭りでのバザーの収益金124万円を、韓国ソウルの重度重複障害児施設「天使院」へ寄付したのは、平成6(1994)年のことでした。

バザーを手伝って下さったボランティアの方たちも一緒に韓国に行き、収益金をお渡ししました。それがきっかけとなって、韓国からさくら苑に介護の実習生が何度も来るなど、交流が生まれました。

またサムルノリ(韓国の農楽をもとに4種の楽器で演奏する現代音楽)の演奏グループが来て、日本の和太鼓チームとセッションする機会もあり、会場の旭公会堂は満員の盛況でした。

バザーの日、宮城県矢本町(現在は東松島市)から

はボランティアの方たちがササニシキ持参、泊りがけで手伝いに駆けつけてくれました。早朝からササニシキのおにぎりをたくさん作って販売していただき、収益金に大いに貢献してくれました。その後、私たちも矢本町を訪ね、現地では高齢社会についての意見交換会を行いました。

また、お祭りのイベントの一環で、風船に花の種とメッセージをつけて飛ばしました。1カ月ほど後、そのメッセージを見た群馬県の方からジャガイモがどっさり送られてきたこともあります。

こうした交流の輪に、ご入居者も職員や近隣の方々、ボランティアと一緒に参加し、喜びを共にしました。

ご入居者はお祭りの日、牛乳パックを素材に作ったハガキを売ったり、子どもたちに水鉄砲の作り方を教えたりして、世代を超えて交流を深めました。

様々な立場の人々が参加・交流し、ご入居者も参加する。自分にできることはやる。そこにご入居者が主体的に生きるきっかけを見出し、その喜びを実感してほしいと思ったのです。ともすれば世話をする人、それを受ける人の固定的な関係に陥りがちな職員との関わりを、もっと柔軟な関係に発展させることを願いました。

お祭りは、特養ホームを開かれた場所にする良い機会になりました。私たちは常々、世間一般にまだ根強かった特養ホームに対する偏見を払拭し、見方を変えてほしいと願っていました。お祭りの日は施設の中もす

べて開放し、どこでも自由に入出入りできるようにして、さくら苑と地域との垣根をなくしてゆきました。





夏休みに行われたおもちゃづくりの風景

昭和59(1984)年さくら苑開設以来継続して… 『地域交流』

行ってみたい所に行き、新しい出会いを持つ

さくら苑では、おもちゃ美術館活動、ヨコハマY²共和国活動、お祭りなどを通して、地域と交流する機会をつくってきました。高校生ボランティアの体験学習の受け入れ、幼稚園児の訪問、中学校特別支援学級の生徒たちの訪問・介護体験なども積極的に受け入れ、交流してきました。

こうした交流を積み重ねながら、外から来てくれるのを待つだけでなく、外の社会に出かけて行くと考えました。そこで、かねてから交流のあった都岡小学校へ出かけ、社会科の授業を参観しました。授業の中で、江戸時代の武士の楽しみは何だろうという話から歌舞伎の話になり、歌舞伎に詳しいご入居者が生徒たちに「歌舞伎は最後に見栄を切るところが見せ場なんだ」な

どと伝えていました。

同じ旭区の若葉台団地の地区社会福祉協議会に、さくら苑からの提案で実現したのが「福祉交流体験・孫子老(まごころ)の日」です。

この企画の中では、地区の小中学生やお母さんたちが「三世代交流」を実現してくださいました。ご入居者一人ひとりにお母さんや小中学生が付き添い、「孫」と「子」と「老」が一緒にひとときを過ごす試みです。

車いすを押してもらいながら街中を散歩したり、高層住宅街の風景を見て回ったり、ショッピングしたり、「昼食は何がいいですか?」と聞かれて久しぶりにレストランで食事をしたり。施設内の生活とはまるきり違う体験ができ、ご入居者は解放感を味わっているようでした。

若葉台団地のショッピング街の方々は、車いすの高齢者をにこやかに迎えて下さいました。昼食に入ったお寿司屋さんでは、カウンターが高過ぎてしまう小柄な方のために、椅子に座布団を3枚も重ねる配慮をしてくれました。

商店街でご自身の娘さんやお孫さんへプレゼントを買う方もおり、「どのエプロンを買おうかしら…」と悩んでいる姿は、普通に生活する人のそれでした。若葉台の方々の思いやりの気持ちを実感でき、地域に支えられて生きる喜びを感じることができた一日だったと思います。

私たちの生活は地域社会と密接につながっているの

が自然です。ともすれば、特養ホームは社会とは関わりの少ない存在に陥りがちですが、その入居者も社会の一員です。自分から街へ出て行く試みは、その意思表示でもありました。

街に出れば、地域の人たちが支えて下さいます。でも実は一方的に支えられるのではなく、地域の若い人や子どもたちも、高齢者の姿から何かを感じるのではないのでしょうか。高齢者が街とのふれあいを必要とするように、街も高齢者を必要としていると、私たちは強く思います。そこに地域とつながる意味があると考えています。



(左)お花見 横須賀の菖蒲園にて (右)ナイアガラの滝をバックに記念撮影

昭和60(1985)年ごろから継続して… 外出を楽しむ『空飛ぶじゅうたん活動』

旅立ちの日まで、日に日に新たな 今日を生きる

さくら苑の開苑当時、私たちが目指したのは「地域との交流もある普通の生活に近い施設づくり」でした。しかしご入居者は生活行動に障害を抱え、職員も介護活動に忙しく、外出の機会をつくるには多くの準備が必要でした。しかし、「いろいろ工夫すれば必ずできるはず」との思いから実行したのが「空飛ぶじゅうたん活動」です。

特養ホームに入居中であっても高齢であっても、ご自身のお金を使っただけのお出かけは楽しみなもの。身体が不自由でも、ご家族やボランティアさんの手助けがあれば外出できます。服もよそ行きを着て、女性ならお化粧もして出かけたくくなります。ホテルで食事となれば、きちんとした服でなくちゃ…と思います。そういった

意欲がご入居者を生き生きと輝かせます。

年間計画を立てていろんなところへ出かけました。中華街で中華料理に舌鼓。犬を連れて湘南海岸の散歩へ。横須賀の菖蒲園で現地のボランティアさんと共に花を楽しむ。

遠い昔、初恋の人と歩いた思い出の桜並木をもう一度歩きたい。生まれ故郷を訪ねたい。先祖のお墓参りがしたい…。そうした一人ひとりの希望にできる限り向き合い、実現させていく活動です(今後益々強まるそうした願いを支援するため、別組織としてさくらトラベル社が活動しています)。

ある男性ご入居者の希望で、子どものころからの夢だったナイアガラの滝の観光を行いました。その方は病

気の後遺症で片麻痺の上になんか思い、すっかり気落ちしていましたが、旅行が実現できるとわかると、再び元気を取り戻しました。そして観光旅行を終えて、さくら苑に帰ってきたときには「次はオーストラリアに行ってみよう」と言いました。

あれほど生気をなくして、声かけにもはばかりしい返事がないほど塞ぎ込んでしまっていた人が…と私たちは目を見張る思いでした。希望を持って生きるということはこういうことなのか、こんなにも生き生きと、人生に向き合えるようになるものなのかと、改めて実感しました。

その方はナイアガラの滝の観光から帰った翌年の暮れ、がんの転移が見つかり入院となりました。入院から

3カ月経過したころから病状は厳しくなり、それと共にさくら苑に帰ることを強く希望するようになりました。彼の強い意思を医師も尊重し、一泊二日の外泊許可が出ました。さくら苑でまる一日過ごした翌朝、病院に帰るとき、「俺はもう病院には帰らないよ」と強く主張されました。目が異様に光っていたのを覚えています。病院側の了承はなかなか得られませんでした。最終的にはご本人の希望を受け入れてくれました。そして人生最後の日々をさくら苑の仲間たちの中で過ごされ、桜咲く春、みんなに見送られて旅立たれました。

ナイアガラの滝の観光、さくら苑での人生最後の日々。自分で選択し、願いを成し遂げられたその生き様は、私たちに大きな示唆を与えるものでした。